

上條雅子先生のご退職にあたって

——走りながら考え、考えながら走り続ける人生の登山家——

深澤 俊昭

上條先生が本学に着任されてから、はや二十年の歳月が流れ去ろうとしています。まさに光陰矢のごとし、当時四十路の自分自身がすでに六十路も半ばに差し掛かっていることと相俟って、先生のご退職がわが身のこのように感じられ、今更ながら時の流れの速さに驚くばかりです。

先生に初めてお会いしたのは、先生がロンドン大学で教育学博士号を取得して帰国され、本学の専任教員公募に応募された面接の場でした。イギリスでの留学経験を持つ者として、五名の人事選考委員の一人に名を連ねていた私は、上條先生の書かれた三百ページに及ぶ博士論文に接し、この方はものすごい勉強家だなという思いを強くして面接に臨みました。今も勿論そうではあるのですが、当時は、外国人がイギリスで博士号を取得するのは至難の業とされており、特に英語を駆使して論文を仕上げることは日本人にとっては極めて稀なことであったのです。担当予定科目の一つに「オーラル・コミュニケーション」があったこともあり、面接は日本語と英語とで行われましたが、先生は終始落ち着いて対応され、しっかりした方であるとの印象を受けたことを今も思い出します。

上條先生の夫君が外交官であったことから、本学に採用となった場合でも、いつ何時夫君と共に任地に同行されることがあるのではないかとの危惧の念から、人事委員長がその可能性を尋ねたとき、上條先生は何らの躊躇もなく、職業人として、そのようなことは決してありません、と答えられたのが強く印象に残っています。実際、本学に着任されて以来、夫君は何度か海外に赴任されたと同いしましたが、先生は約束を守られ、神奈川大学の教員としての職責を貫かれてきました。後で伺ったことですが、『女性は家庭の都合等で仕事をやめるということがよくあり、それには様々な事情があるのでしょうが、一旦職業人となった以上は、「だから女性は無駄目なのだ」というようなことになってはならないと思っています』との強い職業意識をお持ちであることがわかりました。実はその後、ある先生が、伴侶の都合を理由に、ゼミを含む全ての担当科目を放棄して、学年半ばにして大学を辞められたことがありました。学生への影響を含み、その後始末がどれ程大変であったことを思い出すたびに、二十年間約束を守り続けてこられた上條先生の強い責任感に裏打ちされた職業意識が光り輝くのです。

先生の仕事振りは徹底していました。そしてそれはこの二十年間終始変わることがありませんでした。どうしてこれ程までに仕事をされるのかと驚き続けた二十年間でもありません。先生はあらゆる種類の仕事を、決していやな顔をされることなく、むしろ進んで全てを引き受けられました。仕事に不満を漏らされたことばを耳にしたことは一度もありません。夜研究室を出られるのが最も遅いのが上條先生であるということ、たまに私自身の帰宅が遅くなる時に守衛さんから聞いたことがあります。先生から送られる仕事のメールが、夜中の二時、三時、時には明け方に入っていることが度々あり、上條先生は「日本のナポレオン」なのか、一

体何時休まれるのかと驚異に感じたことがありました。「なぜ（危険な）山に登るのか」、「そこに山があるからだ」の世界に生きる人と同様に、先生は、「なぜ（そんなに）仕事をされるのですか」、との問い掛けに、「そこに仕事があるからです」、と言われるに違いありません。

学内にあっては、先生は何よりも学生を大切にされました。ご担当の「卒業研究」の合宿を常時年二回実施され学生間の交流をはかってこられました。これは、正に「ゼミの神大」を地で行く活動であり、先生は本当に多くの学生から慕われてきました。また、先生は「日本語教員養成課程」立ち上げの中心メンバーとして、授業（教案）モデルの作成から実習校の開拓、そして教科としての「日本事情」を担当されたのを初めとし、アストン大学との交流事業に関わるあらゆる仕事（神大学生の引率・講演、アストン学生・教員の受け入れ・講演）に関わられました。もし先生がおいでにならなかつたならば、これらの事業は決して円滑には進まなかつたでありましょう。学科内においては、入試委員、カリキュラム委員、幹事、学科国際交流委員、学科及び大学院の予算委員、大型情報機器導入の責任者、PC学習室責任者、スピーチコンテスト責任者、（英国）ホワイト・ホース劇団上演（シェイクスピア公演）の責任者、英語教育研究大会副責任者（予算導入、関係者調整、司会）、運営委員、主任・・・とあらゆる種類の仕事をされてこられました。

学外にあっては、日本比較教育学会、異文化教育学会、日英教育学会、日本教育学会、世界比較教育学会、ヨーロッパ比較教育学会、英国国際比較教育学会のアクティブ・メンバーとして活躍されてこられました。昭和六十四年（千九百八十九年）以来、JICA（国際協力機構）での講演を続けてこられ、また、日本外交協会、マレーシャ東方政策研修オリエンテーション、社団法人国際フレンドシップ協会、その他多くの場で講演

をなされてきました。先生の業績は、著書七冊、学術論文三十九本、講演その他四十に及びます。正に八面六臂のご活躍そのものと言えるのではないのでしょうか。

昔、経済学を勉強していた頃、M・ウェーバーの著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、ピューリタンの倫理が近代資本主義の成立に強い役割を果たしたという説を学びました。即ち、ピューリタンの強い倫理観と勤勉な精神が近代資本主義の合理的精神と結びついたという説でした。上條先生が研究室に聖書をお持ちであること、また、教会に行かれるということも伺い、先生の強い職業意識がプロテスタンティズムに起因する職業倫理にまで高められているのではないかと思うようになりました。先生が学科主任を務められていた平成十七年五月、先生は、くも膜下出血で緊急入院手術を受けられました。意識が戻られた手術の二日後、病室の先生から私の自宅に仕事の電話が入りました。許可を出さなかった医師を説得して、とうとう携帯電話とパソコンを持ち込まれたとのことでした。びっくり仰天したのが先か、お元気な声に安堵したのが先かは定かではありませんが、とにかく言葉がありませんでした。正に、度肝を抜かれたというのはこういうことを言うのでしょうか。また、手術直後の五月末に予定されていたメキシコでの国際就学前幼児教育学会で基調講演者として招聘されていたことから、どうしても出席しなければならぬと主張されて、家族の方と医師を困らせたと、あとで家族の方からお聞きしました。更に、学科の他の先生に迷惑をかけることは出来なうと言われて、周りの人たちの心配をよそに、医師の診断書を添えて秋学期より再び学科主任の仕事に就かれたのでした。先生は小学校から大学を卒業されるまで、ずっと皆勤で通されたと伺いました。又、先生は中学校からの六年間を、ご両親の元を離れてミッション・スクールの寄宿舎で生活されたそうですが、その体験を

通じて正にイギリス的な「自由と規律」の精神を育まれたのでしょう。学生にもこの自由と規律の精神をよくお話になっていたと言うことを学生からも聞くことができました。先生のこの持ち前の精神が、イギリス的ピュリタニズムの職業倫理にまで高められ、先生を前へ前へと推し進める源泉となったのでしょうか。

聖徳太子は七つのことを同時に行うことが出来たという伝説がありますが、上條先生は、七つどころか八つも九つものことを常時同時進行されていました。学生のこと、授業のこと、研究のこと、学科、学部、大学院、大学の仕事のことから家庭菜園のこと、ハーブティーのこと等々……、話は多岐多彩で、突如新しい話題が出ることも珍しくなく、また、話の途中で突然違った路線に乗り入れることもあり、「あれっ、今何の話をしているのかな」と、コミュニケーションにおける推測・類推の大切さを実体験する機会をしばしば与えられました。話が自然と元に戻ることも、戻らないこともありました。先生の中では全てがバランスをとって同時進行をしているようでした。正に千手観音の手をお持ちであるといっておよいのでしょう。実は、「走る千手観音」、というのが、私が密かに上條先生につけたニックネームでした。これから先生の多重複々線のお話が伺えなくなるのは何とも寂しい限りです。

先生はこれからどこまで走り続けられるのでしょうか。百歳まで、いや、「あなた百まで私は二百まで」とおっしゃるのでしょうか。きっとその強い意欲と精神力でどこまでも走り続けられるのでしょう。先生は仕事が必要ならば仕事を作り出す方です。そして、人生の山を登り続けられる方です。先生のエネルギーギッシュな生き方に圧倒されながら、先生がこれからも御健康で御活躍を続けられますことを心より祈念して、御退職にあたっての言葉とさせていただきます。